

# ラオスのこども通信 15号

(1999年12月発行)



麻布十番納涼祭り・国際バザールにデビュー!  
ラオス人留学生も応援に駆け付けてくれました。  
(8/20-22) 詳しくは本文11pに。



## 読書推進の活発化に向けて

森 透

ハックアーン・セミナー[1999年7月19-24日]の報告

ハックアーンとはラオス語で愛読の意味。ASPBヴィエンチャン事務所のラオス人スタッフが発案し、95年から進めてきた学校図書室プロジェクトです。ASPBの呼びかけで行われた今回のセミナーは、カウンターパートであるラオス国立図書館との共催で、ハックアーン実施校33校と各子ども文化センター(CCC)とともに他の学校やNGOのSVAも参加。開会・閉会式には情報文化省、教育省から副大臣、局長も出席し、いわばオール・ラオス図書館会議となりました。1週間にわたって各図書室の報告、活性化に向けた討議、読み聞かせの実習などが行われ、読書推進運動の新たな方向が示されました。

### ■各県に広がるハックアーン

ハックアーンに取り組む以前の学校への図書普及・読書推進はどうだったかといえば、89年ごろよりラオスの国家プロジェクトとして小学校への図書箱(約140冊の本が入っている)の配布が行われてきました。ASPBもこれに参加するとともに、

一方で国家プロジェクトとは別に、より軽量の布製の図書袋を独自に開発して国立図書館への支援として学校に届け、教員の研修も行ってきました。と同時に中学、高校への図書配布も実施してきました。

これらの図書普及・読書推進活動は首都のヴィ

エンチャンから離れた各県を重点的に行ってきたのですが、ASPBでは、実はヴィエンチャンが本の空白地帯になっていることに気づき、ヴィエンチャンからハックアーンの取り組みを開始しました。これは、学校の空き教室や倉庫あるいは職員室の一角を図書室として確保し、自ら名乗り出た意欲ある学校に対して、ASPBが直接出向いて調査、面談をしたうえで開設するという方式をとっています。こうすることによって、より有効に図書利用ができるようにしたのです。セミナー開催時点で、ヴィエンチャン特別市および県、ルアンパバン、サイヤブリ、シェンクアン、チャンパサックの各県33の小中高校で実施されています(99年12月現在で40か所)。

#### ■「ハックアーンができて 子どもが学校を好きになった」

今回のセミナーは、各ハックアーンの活動報告、問題点の洗い出し、そして読書、図書館、紙芝居などの意味や価値についての講義、さらに本の補修や読み聞かせの実践をして、今後の読書推進運動に向けた地域ごとの行動計画の策定へと展開していきました。

各校からの報告(評価)を総合すると、次のようになります。

ハックアーンができて子どもが学校を好きになった。本を読むことによって、ラオス語を学び、自分で勉強し、教科以外のことも学ぶようになった。ハックアーンは自分の学校だけのものではなく、地域の人々や周辺校も利用している、などの声が相次ぎました。

一方、本の紛失を訴える声も多く出て、その対策として、紛失したら弁償させる、道徳の成績を下げる、生徒に警備員のような仕事をさせるなど、苦勞している様子がうかがえました。

また、改善のための支援要請として、図書室が職員室との共用になっていて狭い、暑い、本が足りない、司書がいらない、といった声が次々とあがりました。

#### ■主催者は、地域を巻き込んで自ら改善する 努力を要請

意欲はあるものの、まだまだ依存的な姿勢のある学校に対して、ASPBのラオス人コーディネーターのドゥアンドゥアンさんは、「ハックアーンは、やりたいという意志を持った学校がやる取り組み。やりたくなかったり、本が好きでないならやめていい」と言い、国立図書館員は、「狭いとか、独立した図書室がないとか、専任の職員がいらないと言うが、その条件でハックアーンをやると言ったのはあなたたち自身ではないか。それを今さら何をいうのか」と言い、自らの努力を促しました。

私たちは、計画策定の話し合いが、支援要請だけでなく先生自身が何をしていくのかを具体化するという方向に向かうよう、次のように提案をしました。

「なによりもまず教員自身が本を好きになること」「本を動かすこと(本をハックアーンへ。本を利用者のもとへ。すなわち利用の活性化)」「子どもと地域を巻き込むこと(人手が足りない分、子どもや村の人に手伝わせることで解消するとともに、地域にハックアーンを浸透させる)」というように。このようにして、「あなたの村にはハックアーンを発展させる要因がこれだけある。それを活用するのは先生」と図に書いて例示し、考えるヒントとしました。

#### ■次々とアイデアが出されて

計画策定(1999-2000年)は地域ごとにグループ化して行われました。各ハックアーンが利用時間を延ばす、生徒に手伝うように教育する、村人から本の寄付を募る、寺の集まった寄付・賽銭を本の購入費用としてもらうなどのほか、学校同士で相互貸借する、同じ地域の学校が定期的に集まって報告会などを開き、ニュースレターをつくる、婦人デー、子どもの日などに読むことのコンテストをする、役所に司書設置を要請する、青年会、婦人会の人や本の好きな人を司書にするといった

計画、アイデアが出されました。

CCCのグループの計画は、すぐにやることとして資金作りのために、寄付箱を作り、村の人に宣伝する。花を売ったり、バイクの駐車をやる。NGO、役所に報告して、必要な協力をあおぐ。今後の計画として、簡単な小説の本をつくる（お年寄りの話をもとにして昔話集を作る）。子どもに司書の手伝いをさせる。サービスの面では、1日40～50人の利用人数を60～70人に増やす。そのため、例えば、村の人に「畑仕事をやっていますか。図書室には農業の本がありますよ」と声をかける。また、子どもの活動を増やすため、昔話などをもっとしていく、などが出ました。

計画の中には、その場の思いつきのアイデアも見られたり、参加した各ハックアーンには、意欲、意識の高低があるものの、地域ぐるみで取り組むというスタンスこそが重要であると考えることができま

#### ■点から面への動き、それに応じた 取り組みが今後の方向性

ASPBは90年代に入って『ピクリ星』（田島伸二氏の児童文学作品のラオス語版）の出版を皮切りに、図書箱・図書袋の小学校への配布、配布先の教員を対象とした読書推進のためのセミナー、本づくり、CCC(子ども文化センター)開設、紙芝居の普及(ワークショップの開催、ラオス人の作品の日本での出版、作家育成、ハックアーンの開設などを行ってきました。今回のセミナーでは、これらそれぞれ「点」で行われてきた活動が、ここにきて有機的につながりあい、「面」として動くダイナミズムが示されています。そのなかで、ラオスでの読書推進にとって、先生の意欲を引き出すことの重要性がいっそう鮮明になってきました。

ハックアーンが学校の図書室に留まらず地域の図書室として機能し、さらに相互に連携し合うことは読書推進が空間的に広がることであり、先行校と新規校との時間差を情報交換によって縮め、ノ

ウハウ共有という広がりをもたすことが可能となります。さらに、ハックアーンだけでなく地域の図書箱・図書袋設置校も巻き込むことも可能で、相互貸借によって実質的蔵書の増加をもたらすことができるのです。

また機能面において、本を作り、図書室に置き、読み手を引きつけ、読み手の手元に届かせるという流れへの関心を学校の先生たちが持っているという点もとても重要といえるでしょう。

CCCの図書室も重要な位置を占めています。地域のハックアーン実践校と図書箱・袋設置校のキーステーションとして活躍することが期待されます。

ハックアーン活性化のエネルギー源となるのは、本を定期的に提供していくこと（あるいはその仕掛けを共有すること）です。ASPBでは現在、「民話絵本コンクール」の企画を進めています。一方で、読書推進を図るうえで忘れてはならないのは地域の識字状況の調査です。国際機関によるデータはありますが、おおまかな目安に過ぎず、地域格差も大きいのが現状です。先生たちは、子どもたちに文字の忘却はない、非識字の人は減っているといいます。私たちは実態をつかめていません。学校に行けない子の実態調査も必要でしょう。ハックアーンは学校に行けない子にとっても役立つものであるべきと思います。

さて、ラオスの識字向上、読書推進をめざすASPBは、同時に、その運動の担い手であるラオスの人々が自立して運動を進めることをめざしています。今後、そのシナリオをどう描くか。ASPBでは現在、話し合いを進めています。

なお、今回のセミナーの通訳は、かつて日本に留学していたサノーン君という若者に依頼しました。彼は、「本の紛失は取り締まりでなく、時間をかけても教育で解決するべきことです」「本の寄付は、ぼくも友だちに声をかけてみようと思っています」と発言していました。サノーン君のような人物を育て、仲間にしていくのもまた私たちの楽しみです。

## 5年目の子ども文化センター

野口朝夫

1994年に、情報文化省とASPBのチャントソンの話から始まった、ラオスで初めての情操教育施設(日本の児童館のような)子ども文化センター(CCC)活動も、5年が経ちました。

当初、ヴィエンチャンのみであったセンターも、ASPBが支援しているだけでポリカムサイ、サイヤプリ、ルアンパバンと全国4カ所を数えます。それぞれのCCCは図書館活動、読み聞かせ、ゲーム、絵画、織物、伝統音楽、伝統舞踊、英語などのクラスをもち、地域の子ども(主に小中学生)に開かれた施設として、情報文化省に指導され、それぞれの地方自治体の教育委員会、情報文化局が協同して独自に運営しています。

これまでASPBは運営資金の提供、日本からの専門家派遣による活動の活性化、指導などを継続的におこなってきましたが、近年他県からも開設支援要請が相次ぎ、また独自に活動を始めるセンターがでてきたり、全国の地方行政レベルで、CCC活動を持つことが流行になるほど、全国的に広がってきています。

しかしASPBによる活動調査の結果、施設運営は草創期を脱し安定し始めてはいるものの、活動理念にばらつきが見え、さらに活動の「質」についてはまだまだ問題があることが判ってきました。また、このような施設運営支援は、継続的な支援が前提となり、なかなか現地の経済的自立を組み立てることが難しい側面を持っています。

そこで、今後のCCC活動の質の向上を図り、長期展望を計るために、全国の関係者が集まり、活動の意味を考える場を持つことになりました。

会議はヴィエンチャンにて8月11～12日の2日間、朝の8時から夕方5時まで、情報文化省大衆文化局の関係者、上記4 CCCの他、新しく活動を始めたウドムサイ、ゲンタオ、ラクサオ、カムムアン、ポーケオの組織の責任者など40人ほど

が集まって開かれました。

まず、人材育成を重視する観点から、CCC活動を今後とも積極的に全国に広めてゆきたい、さらに将来的にはNGOの力を借りないでやってゆけるようになりたいと、政府の考えが情報文化省副大臣から述べられ、その後各CCCの現況報告がありました。

### ■CCCの現状報告

・当初、周囲から何が目的の活動か理解されず、幼稚園と間違えられたり、政府の役人や会社員の子弟しか参加しない傾向が強かったが、次第に町や農村の普通の子どもたちも活動に参加するようになっていく。親からの活動支援、協力も見られるようになり、現在では「CCC」は各地元で認知された存在となっている。

・歌の教室、絵画教室などの活動が盛んになり、収容能力オーバーで、参加できない子どもも多い。

・歌や伝統舞踊、絵画のクラスでは、技術水準が極めて高い子どもたちが出てきて、全国コンクールでも常に上位を占めるようになっていく。

・高校生や大学生になったメンバーが、読み聞かせやゲームを担当したり、休みには郊外に出向いてボランティアとしてCCC活動を担ってくれるようになってきている。

・授業にCCC的な活動を取り入れる学校が出ていく。

というように活動が積極的に展開され、評価を得ている状況にあることが報告されました。

一方、新設既設を問わず、施設の広さが不充分。運営資金が充分でない。スタッフの経験が充分でない。など会に対する支援要請も続きました。

そしてどのCCCも共通して、図書室活動が必ずしもうまく展開していないことも明らかになりました。その最大の理由は図書室の本が少なく(せいぜい1,000冊)、子どもがすぐ飽きてしまう

こと。読み聞かせなどCCC側の働きかけが今ひとつ充分でないことなどです。

各CCCの関心事に、いかにして自主的な運営資金を獲得してゆくかということがあります。これはASPBがこの数年、無限の経済支援は不可能であり、経済自立への道を準備して欲しいと伝えてきたことの結果です。この課題への取り組みとして、乾燥バナナを作り市場で売る、織り上げた反物を町で売る、Tシャツを売る、メンバーカードを売る、子どもを観光客向けのショーに出して収益を得る、などいくつかの例が報告されました。

### ■CCCは何を目的としているのか？

これらの報告に対し、ASPBからは運営支援にあたっての基本的な理解が伝えられました。

・他の世界を知るために、学校でおこなわれているような文字による識字教育は大切。しかし同時に、私はこうしたい、こう感じる、というような自己、主体の形成も必要。「今日は楽しかった！」というような喜びを基本に、自己表現ができる子どもたちを育てる場としてCCCを考えている。先生が黒板に描いた絵を、紙に書き写させるのではなく、私にはこう見えるという、子ども自身で「見える」ものを増やしていくのがCCCの役目であろう。覚えることよりもむしろ感じることを大切にしたい。それがラオスを豊かにしていくと考えている。

・踊りのクラスを、窓の外でたくさんの子ども達がうらやましそうに見ていた。窓の外と中とで断絶がある。まだ充分に開かれた「場」になっていないのではないか？ASPBでは一部の子どもたちが、専門性を高めるような職業訓練のためのクラス活動ではなく、学力、経済力、親の社会的な立場に関係なく誰でもが参加して、楽しさを広げられることを基本にしたい。

・現在は管理側が「開きやすい」プログラムが中心なのではないか。子どもが本当は何をしたいのか、再検討が必要では？例えば体を使うスポーツなどの活動もしたいのでは？

・開館時間も役所に従い、朝8時に開ける必要があるのか？10時に開けて、夜7時8時まで開くなど、子どもの立場で考えて欲しい。

・CCCの図書室は知識の習得より、読む楽しさを身につける場にと願っている。小学生が楽しめる本を増やし、図書室がCCC活動の中心になるように考えていこう。図書室が充実すれば、CCCを地域の読書啓蒙活動のセンターにできるのではないか。ハクアーンや、図書箱のフォローなどの際もCCCを拠点としてできないか？

・収入確保のために、大人のための英語学校を開くことは異論はないが、子どもを利用するのは違和感が強い。活動がお金を獲得するためのものへと転化してしまう心配がある。

・ASPBは、今後、CCCに対する資金支援から、活動ノウハウの支援へと徐々に姿勢を転換してゆく。などを伝えました。

### ■今後の展望

会の意見を踏まえ、さらに積極的な意見交換が続きましたが、今後ラオスでのCCC活動を発展させてゆくためには、個々のCCCで今何が必要かという議論だけではなく、ラオスの子どものためには、今何に重点を置くのが良いのかという、総合的な発想が必要だと意見がまとまりました。具体的には、活動経験が豊富なサイヤプリのCCCが活動の訓練センターとしての役割を果たし、情報文化省直轄の中央センターが全体の調整をおこなうということで合意されました。

最後に参加者により、以下の三項目がCCC活動の原点であると承認されました。

- ①CCCは子どもたちのための楽しみのある場である
- ②CCCの中心は図書室にある(火)CCCは子どもたちの内面の豊かさを探求する場所である

今回の会議は、このように活動の理念を再確認するとともに、今後のCCC活動の展開をラオス社会のなかで作り上げてゆくという道筋が見えたことに、大きな意義があると思います。

<出張報告>

## ヴィエンチャン事務所の日々

赤井朱子

5月7日から8月20日にかけて、現地へ出張しプロジェクトの調整をおこないました。この3ヶ月半の間には、専門家派遣セミナーや評価会議など、会にとって重要な大きな行事が続き、その準備と調整を現地スタッフとともに行うとともに、日常業務の調整を行いました。

### ●何の絵をかく？

ある時、ラオスの子ども達に絵を描いてもらうために、事務所から車で20分ぐらい離れたところにあるホアイホン小学校へ行きました。小田原ユネスコ協会を通して日本の小学生の絵が送られたので、お礼の絵をラオスの子ども達に書いてもらうためです。ホアイホン小学校は生徒数366人、教員10人、1年生が1クラス、2年生から5年生までは2クラスある、やや大きめの学校です。

進級試験を終えたばかりのその日、絵を書くために4年生と5年生の子ども達が集まってくれました。試験を終えたばかりのせい、子ども達の顔は何となく晴れやかで、一方先生方は職員室で採点にとっても忙しい様子でした。ラオスの学校では一般的に図画工作の授業があまりおこなわれていません。特に絵の具や画用紙といった材料が学校にはありません。そこで、学校に行く際に画材を購入し持って行きました。しかし、持参した紙の数よりも多くの子ども達が集まってくれていたため、数人で1枚の絵を仕上げることになりました。はじめに先生が黒板に画題を書きはじめました。「凱旋門」「友好橋」「タートルアン寺院」などなど、まるで観光ガイドブックのようです。日本から送られた子ども達の絵が、お祭りの様子など日本ならではのものが多く描かれていたため、先生が気を使いヴィエンチャンの有名な建物を描かせようとしたのです。

すると、多くの子どもたちが、教科書の挿し絵をそのまま写しはじめました。それではつまらないので、私が「教科書は写さないで」というと、今度は子ども達の手が止まってしまいました。いくら市内の有名な建築物といっても、その実物を見たことのある子どもは少なく、これまで絵に描いたこともないので。そこで先生には悪いけど、私は提案してみました。「もっと身近にあるもの

を書いてみたら？例えば、友だちの顔とか、学校の様子とか、家の様子でもいいよ」とすると、子ども達の手が少しずつ動き始めました。

友だちをモデルにするため、モデルの友だちに動くなと言っている子もいれば、その子をモデルにして絵を描きはじめる子もいます。

「家で飼っている動物も描いていい？」「もちろん」その子の絵には、水牛、ブタ、ニワトリ、アヒル、魚など、たくさんの動物と、それに餌をあげる自分の絵が描かれました。

ふと見ると、小さなノートの切れ端に木の絵を描いているひとりの少女がいました。画用紙が足りなかったからか、または自分一人で絵を描きかたかったからか、自分のノートを破って描きはじめたようです。その木があまりにも素敵だったので、私は慌てて画用紙がないか探してみました。偶然にも、1枚だけ張り付いて残っていた画用紙があったので、その子に渡しました。紙には一枚一枚の葉がていねいに描かれ、画面一杯に葉が生い茂りました。最後の色をつける時には、友だちと一緒に手伝って一枚一枚の葉にていねいに色をぬっていました。お寺に生える大きな菩提樹の絵が出来上がりました。

### ●事務所のスタッフたち

ヴィエンチャン事務所内にある子ども文庫では、94年の開設以来たくさんの子ども達、そして大人達に利用されています。これまで、蔵書チェックや図書の補充、補習などは、随時スタッフの手により行われてきましたが、文庫の蔵書数が増えるしたが、整理が追い付かなくなってきました。常に子ども達が利用しにやってくる中では、整理もなかなかできません。そこで、思いきって平日の5日間文庫を休みにし、スタッフ全員で分担しながら蔵書の整理をしようということになり

ました。

文庫の開設当初よりスタッフであり、現在文庫責任者であるバンオーンは、現在の蔵書をチェックし、リストを作りなおします。文庫スタッフで、清掃担当者でもあるカオは、ぼろぼろになった絵本などの補修と、新着図書にラベルを貼るなどの作業を行います。同じく文庫スタッフであるチャンシーは、大人や高校生向けの図書を中心に、補修やラベルの作成を行います。コンピューターのタイプを得意とする会計担当のポーケオは、図書の補修を手伝いながら、利用者への注意書き等のタイプも作成します。事務所責任者であるソンベットと私は、協力しながら日本語や英語の図書のタイトルをラオス語に訳して、本に張り付けるという作業を行います。

文庫には、ラオス語の翻訳文を張りつけた図書の他に、絵だけ見ても楽しめるような図書もたくさんおいてあります。ただ、日本語のままだと、スタッフも読めないのが本の管理がしにくいこと、また図書のタイトルだけでもわかれば子ども達がより内容を楽しめることから、タイトルだけラオス語に訳しておくことにしました。

初めて図書整理休館となった文庫ですが、スタッフ達は休み返上で作業を行いました。ふだんは、2階の事務室と1階の文庫に分かれ、ばらばらに仕事をしていることの多い、5人の現地スタッフですが、この1週間の間は共同で相談しながら作業をしていました。手を動かしながら、ふだん時間がなくてなかなか話せなかった、文庫の改善案についてお互い意見を出し合ったりもしました。こんなスタッフたちに支えられながら、文庫を含めたプロジェクトが今後も充実していくことと思います。

### ●文庫にくる人々

公共図書館がほとんど整備されていないこともあり、文庫には、子どもたちだけでなくたくさんの大人も利用しに来ます。とにかく読書が好きで、毎日のように息子と一緒にやってきては、自分の方が熱心に本や新聞を読んでいるおじさん。子どもをおいてでも毎日のようにやってくるので、私は仕事のことが心配になってしまうほどです。

ある時、「こぐまちゃん」のシリーズの本をたくさん抱えているおばさんがいました。よほどの

本好きなのか、または子どものためかと思っていると、おばさんが言うには、

「昔少しだけ日本で暮らしたことがあり、漢字は読めないけどひらがななら読めるので、日本語を勉強したくて、この本を借りてるのよ。翻訳文のラオス語を読みながらひらがなを読んでみると、日本語が思い出せるのよ」

また、他の用事で事務所を訪れる人の中に「この本はどこで買ったの?」と聞く人がいました。以前なら、本そのものに興味をもつひとはいなくても、本を買うことに興味を持つ人はいませんでした。人気なのは英語のテキストにしても、本を買おうという人が出てきているというその事実には、驚きつつ嬉しくなりました。ラオスでも少しではあるが、本を購入するものであるという価値観がでてきているようです。そういえば、会が出版した「絵とき辞書」を買っていった元僧侶の勉強好きな若者もいました。

私が現地に行くようになって、毎回会う少女がいます。名前はテン。はじめて会ったのは5年前。まだ小学生だった彼女は、仲の良い同じ年頃の3人とともに毎日のように文庫に顔を出していました。4人組の中では一番本が好きで、毎日よく本を借りていました。中学生になると、小さな子に本を読み聞かせたり、当時一人しかいなかったスタッフが昼食の間、スタッフの代わりに貸し出しを手伝うこともありました。事務所に寝泊まりしている私に、ラオス語を教えてくれたのも彼女たちでした。

仲の良かった4人は、中学を卒業後、縫製工場や日夜働いている子、家業を手伝っている子などばらばらになってしまったようですが、彼女は高校に進学し、前ほど頻繁でないものの時々文庫を利用しにやってきています。今年見かけた彼女は、同じく本が好きでよく利用しにくる男子高校生と話をしていたり、親戚の小さな妹や弟をつれてやってきたりしていました。

おそらく彼女の人生は私と同様、事務所文庫と出会わなければ全くちがったものになっていたことでしょう。文庫とともに成長していった彼女が、今後どんな大人になっていくのか、次回にも会えることを楽しみにしつつ、ラオス出張を終えました。

## 2001年以降の活動のありかたについて

1982年の設立から来年で満18年。人間なら進路に悩むお年ごろです。社会的な存在としての自覚、責任ある行動を求められ、独立・自立を期待される、いわば人生の節目。会も、これまでの活動をふりかえり進むべき方向を探ろうと、去る9月12日、まる1日かけて話し合い(通称「日帰り合宿」)を行いました。

### ■長い長い話し合い

このテーマをめぐって、会は数年前からたびたび話し合いを繰り返してきました。

#### <活動に対する会のこれまでの考え方>

●1994～95年ごろ：会の規模をむやみに大きくせず、メンバーはそれぞれ本業を持ち社会生活に基盤をおきながら「片手間ボランティア」として会の活動に継続して取り組むことを合意。

(1995年活動概要)

●1997年9月：活動の原点は出版であること、メンバーは「片手間ボランティア」として活動に取り組むことを再確認。各プロジェクトのバランス、東京事務所の人手不足と事務の効率化、ラオス事務所の人材育成、活動評価のしかたなどが課題。2000年いっぱい、会をそれまでの形態で続けていくこと、プロジェクトの拡大はしないことを合意。(1997年11月発行「ラオスのこども通信」10号「さて、これからどうする?」)

●1998年8月：これまでの活動を基本的には継続しながら、(1)現地活動の自立をめざし、人材育成に力を入れること (2)ラオスの出版産業や書籍流通の自立を促すべく、会独自の書店経営も視野に入れること、という展望が示される。

(1998年度総会「2000年末までの中期計画」)

### ■活動の成果が見えてきたことを背景に

本号前半で森と野口が報告しているように、学校図書室(ハックアーン)会議、子ども文化センター評価会議を経て、ラオスでの活動の成果が見えてきました。これは、話し合いを行う上でこれまでとは大きく異なる点です。現地活動を誰がどう評価するのが、これからの会の方向を考える際の課題でしたが、ラオス人自身も加わって合同で評価を行うことができ、しかも想像以上の成果

と言えるものだったのです。

「ラオスの人たちは本気だ。それに対して、私たちはどう応えるのか、応えられるのか?」

### ■「片手間ボランティア」の見直し

これまで「会」は「片手間ボランティア」の個人の共同体であり「私たちにできることを、できる範囲でやっていく」という方針で活動してきました。私たちが「片手間ボランティア」と言うとき、それはプロ化、専門化したNGOの在り方とは一線を画すという自負でもあったのです。

しかし、いま会は、大小さまざまな問題・課題を抱えています。スタッフからは現状のままでは仕事が多すぎて到底やっていけないという声もあがっています。人手不足と多忙を解消し、事務を効率化するには?なかなか手が回らない対外的な関係づくりや情報発信をどうするのか?資金調達には?もっと多くの人に継続的に参加してもらうには?ラオス事務所とのパートナーシップは?メンバー間のコミュニケーションは?

そして何よりも、ラオスでしっかりと根付き、展開している様々なプロジェクトに対する責任は?

#### 【「日帰り合宿」で出された意見】

##### ★マネジメントとプロ化

・プロジェクトについても事務所運営についても管理者不在の状態。責任を明確にし事務効率を上げるには有給専従のマネージャーが必要な時期にきている。

・個の集合から組織へというプロ化の道? 会はその道を選ぶのか?

・「片手間」とプロ化は必ずしも対立する概念ではないのではないのか?

##### ★調査・研究

・これまでは「やりたいこと、できることをや



る」姿勢。ラオスの子どもの教育全体を見渡したうえで、今、何をすべきかという発想が不十分だった。そのためには調査・研究が必要だろう。

★コミュニケーション能力、専門能力

・スタッフのラオス語力を高め、チャンタソンを通さなくてもラオス事務所と円滑にコミュニケーションをとれるようにすべき時期。

・ラオスに対する理解をもっと深めるべき。  
・専門分野の能力が求められる段階にきている。

★国内活動の魅力づくり、ボランティアの参加

・会が求めるのは、実務を助けてくれるボランティアである。しかしボランティアが求める「参加」のあり方はどうなのか？

・東京の実務の中では現地の活動内容がわかりにくい。ラオスについて活動しているという実感が無い。

・活動の「場」の問題もあるのではないか。

★ラオスとのパートナーシップ

・双方の意思の伝達、情報の共有化のため、ラオス事務所に常駐の日本人スタッフが必要ではないか。

・現在のラオス事務所は、東京のやりたいことを実現するための道具になっているのではないか。これを対等な関係にすべき。

・現在のヴィエンチャン・スタッフのソンペットを管理者として育成する方向（可能性）を探ろう。

・プロジェクトと運営の評価を、ラオスと東京が合同で行うべき。

「日帰り合宿」では、こうした問題点を洗い出し、活動形態の見直しを視野に入れながら、解決の方向を探り始めました。まだまだ議論は終わらないのですが、いつものように時間切れ。話し合いは中断してしまいましたが、今後も運営会議などで続けていきます。

\*ご意見などがありましたら、事務局までお寄せください。

お知らせです

●2000年1月から東京事務所は

月曜日～土曜日の10:00～18:00オープン

東京事務所は月曜定休でしたが、新年より日曜定休に。

・土曜日の午後はどなたでも参加できる活動の時間です。活動の説明を聞きたい方、ボランティアに興味のある方は、事前にご連絡のうえ、ご参加を。

・運営会議(原則第2日曜)の前日の土曜はお休みです

WELCOME! 春休みボランティア  
名簿の入力、資料発送などやってみませんか。

●お待たせしました! 翻訳絵本リスト改訂版

日本の絵本にラオス語訳を貼ってラオスへ送る「絵本2000冊運動」の指定絵本が増えます。文字のない絵本(そのままラオスへ送れる)も追加。リストをご希望の方はご連絡を。

●2000年1月29・30日(財)札幌国際プラザ主催  
「NGOとこんにちは! NGO屋台村」

日時: 1月29日(土) 14:00～18:00

1月30日(日) 10:00～16:00

会場: ホテルニューオータニ札幌 朝日ホール  
札幌市中央区北2条西1丁目1番地

東京からスタッフが参加して、活動紹介、翻訳絵本づくり実演、ラオスグッズ販売をします。お近くの方、お会いできることを楽しみにしています。ぜひお出かけ下さい。

●「ピュア広場」参加者募集中

ピュア広場は、キッコーマン(株)とパートナー団体(NGO・NPO)が実施する「楽しく、地球規模で学ぶ参加型プログラム」。1～6月の半年間、8団体8プログラムを予定。ASPBでは翻訳絵本づくりを体験。絵本の読み聞かせを楽しんだあと、その楽しさをラオスの子どもたちに届けようという趣向です。ぜひご参加を。

【絵本を楽しむ、絵本を送る】

日時: 2000年3月11日(土) 14:00～16:00

会場: キッコーマン東京本社KCCホール

参加費: 500円(親子参加は2人で800円) + 絵本代

お問い合わせ先: キッコーマン株式会社広報部

社会活動推進室内ピュアクラブ事務局

TEL 03-5521-5867 FAX 03-5521-5129

●スタディツアー99は見送りになりました

1999年のスタディツアーは、現地の活動体験を考えていましたが、見送ることとなりました。お問い合わせをくださったみなさんには、長い間お待たせした上に実現できず、申し訳ありませんでした。お詫び申し上げます。

【東京事務所の年末年始の予定】

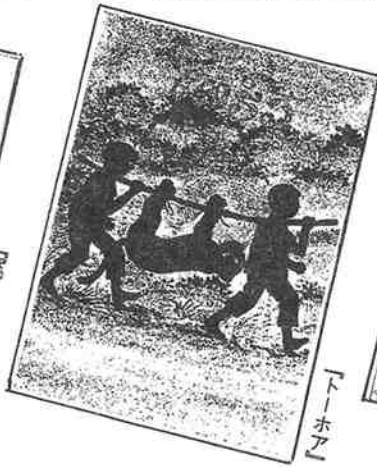
年末年始休み 12月29日(水)～1月6日(木)

運営会議(新年会) 1月16日(日)13:00(1月のみ第3日曜)

プロジェクトの動き (6月-11月)



「窓ぎわのトットちゃん」



「トホア」



「カンバーピーノイ」

<出版>

●印刷完了 3点

9月:ラオス語版『窓ぎわのトットちゃん』4,400部

11月:『トホア(雨もり)』 5,000部

『カンバーピーノイ(孤児と小さいお化け)』4,000部

●「文字絵本 3」挿し絵コンクール

1次選考が4月、2次選考が8月に行われ、15作品が選ばれる。選考は、絵本作家わかやまけんさん、グラフィックデザイナー大竹雄介さんと当会メンバーにより実施。9月4日、現地で、チャンタソンが参加し表彰式が行われた。現在大竹さんの御協力によりレイアウト作業中。2000年出版予定。

●「民話絵本コンクール」

現在、民話絵本作り方の基礎を書いたラオス語のハンドブック作成中。来年現地で募集をし、3月にセミナーを行う予定。

●「環境の絵本」

現在作品検討中。2000年出版予定。

<図書箱・図書袋>

●図書箱100箱、図書袋120袋製作。

12月から2000年1月にかけて、ボリカムサイ県、カムムアン県、サバンナケート県、サイヤブリ県、サイソンブン特別区の小学校110校に配布予定。

(図書袋は1校に2袋配布)

これまでに配布した図書箱図書袋のうち、サイヤブリ県、ルアンバン県、ヴィエンチャン特別市の100校に対して、1月に図書の補充も行う予定。

<図書室(ハックアーン)>

●トンサンナン村図書室オープン

7月18日に当会支援の34番目の図書室がヴィエ

ンチャンでオープン。個人の敷地に立地し、地域の人々を対象とする公共図書館の設立で、おそらくラオス初の試み。オープン式には、建設資金を支援していただいた株式会社興伸の小野伸太郎さんと事務局長の森、赤井が参加。

●「ハックアーン・セミナー」

7月19-24日(報告参照)

●新規学校図書室オープン

9月にヴィエンチャン市内に3ヶ所、チャンパサク市内に3ヶ所新たに開設。さらに12月に3県3ヶ所にオープン予定。昨年までに開設した33ヶ所の図書室に対し、図書の補充も行った。

<子ども文化センター(CCC)>

8月11日-12日 評価会議が行われる(報告参照) 引き続き4ヶ所のCCCの運営を支援。

\* \* \*

各プロジェクトの資金の主な支援者は、次の方々です。(敬称略 順不同)

「窓ぎわのトットちゃん」 出版費：石原静子

「トホア(雨もり)」 出版費：キヤノン株式会社

「カンバーピーノイ(孤児と小さいお化け)」：キヤノン株式会社

「民話絵本コンクール」ハンドブック作成およびセミナー開催費：地球市民財団

環境の絵本の出版費：ラオスの子どもに環境の絵本をおくる会

図書箱図書袋プロジェクト：郵政省国際ボランティア貯金 国際開発支援財団

トンサンナン村図書室建設費、開設費：株式会社興伸 子ども文化センター運営費：郵政省国際ボランティア貯金 株式会社ミクプランニング

\*これらのプロジェクトは、このほか多くの方より指定募金としてご支援いただいています。

## 東京事務所の動き

### ●ラオスの織り・食・子どもたち 7/1-8/31

主催：キッコーマン(株)/共催：ラオスの子どもに絵本を送る会/後援：ラオス大使館/協力：ラオスの子どもと女性を支える会・ホアイホン職業訓練センターを応援する会・勤労者ボランティアセンター  
キッコーマン社会活動推進室のご協力とご支援で、ラオスの織物展やラオス料理教室、絵本にラオス語翻訳を貼るボランティア体験を行いました。8月4日のボランティア体験には場所柄、勤め帰りの会社員の方の姿も見られ、約30人が参加。

アンケートには「ラオスについて初めて話を聞いて、ラオスに関わるきっかけができた」「特別なことだと思っていたボランティアが身近になった」「作業をしながら、これをラオスの子どもたちが読むんだなあと楽しくなった」といった声が寄せられました。私たちにとっても体験イベントは初体験。国内での活動参加の機会づくりとなりました。

### ●「麻布十番納涼祭り・国際バザール」にデビュー! 8/20-22

毎年大勢の人でにぎわう国際バザールに、「ラオス料理」がデビュー。大使館員の胃袋を預かるカンタリーさんの指揮のもと、大使館のみなさん、ラオスからの留学生、会のボランティアのみなさんが一致団結。利益は約70万円に。貴重な自己資金として活動に大いに役立っています。この中からトルコ大地震災害への義援金として3万円を日本赤十字社に寄付しました。協力して下さったみなさんに、この場を借りてお礼を申し上げます。このイベントで、はじ

### みなさま、ありがとうございます

このたび、毎日新聞社より「毎日国際交流賞」を授賞いたしました。日ごろご支援下さっているみなさまにご報告し、あらためてご支援にお礼申し上げます。今回の受賞は、ラオスと日本をつなぐさまざまな活動に対してで、まさにみなさまと人の輪が賞をいただいたのだと、とてもうれしく思っています。これからもどうぞ、よろしく願いいたします。

チャンタソン・インタヴォン



めてラオス人留学生との本格的な協力が実現したのも大変うれしい収穫です。これからもお互いに協力しながらお付き合いしていけたらいいと思います。

●ラオス人スタッフが日本で研修を行いました  
11月6日～21日、ラオス事務所責任者のソンベット、文庫担当スタッフのバンオーン、サイヤプリ子ども文化センター館長のブアチャンの3人が、東京近郊の公共図書館や児童館、文庫などを訪問し、読書活動や情操教育の研修を行いました。研修にご協力くださったみなさん、滞在中お世話になったみなさん、ありがとうございました。研修については、次号で詳しくお伝えします。(この研修および報告書作成の事業は日本財団の助成で行われています)

### ●6月

- 13日 1999年度総会を開催
- 17日 大森郵便局でボランティア貯金配分金交付式
- 23日 大田区国際交流団体懇談会  
キッコーマン「ピュアクラブ」NPO・NGO意見交換会

### ●7月

- 7/1～8/31 アジアを知る国際交流イベント「ラオスの織り・食・子どもたち」共催キッコーマン(株)
- 11日 日曜勉強会「編集者が語る絵本づくり」  
講師：八坂典子さん(福音館書店)
- 14日 キッコーマン世界のしょうゆクッキング「ラオス」

### ●8月

- 4日 国際交流ボランティア体験講座(キッコーマンKCCホール)
- 6日 「国際協力NGO・国会議員フォーラム」出席
- 20～22日 麻布十番納涼祭り「国際バザール」参加
- 23日 鹿島学園高校のみなさんが来訪

### ●9月

- 14日 チャンタソン「毎日国際交流賞」授賞式
- 19日 三鷹国際交流フェスティバル「アジアを学ぼう! 1日学校」参加
- 24日 「チャンタソンさんの毎日国際交流賞受賞を祝う会」に協力
- 25日 小田原ユネスコ協会常任理事会にて活動報告

### ●10月

- 2日、3日 国際協力フェスティバル参加
- 7日 大田区立池雪小学校ユニセフボランティアのみなさんに活動報告
- 9～29日 大森郵便局「ラオスの子ども絵画展」千鳥郵便局へ巡回
- 14日 ちひろ美術館へ『トットちゃん』の出版報告
- 16日 公文国際学園図書委員会が来訪
- 17日 北海道国際協力フェスタ99で講演
- 22日 伊藤忠記念財団の佐藤さんが来訪
- 23、24日 OTAふれあいフェスタに参加
- 25日 国際協力講演会(練馬区役所ホール)で講演  
キヤノン社会貢献室を訪問
- 27日 日野市国際ボランティア貯金推進協会総会にて活動報告
- 29日 国際ボランティア貯金シンポジウム99(メルパルク)にパネラー参加
- 30日 都立小山台高校2年生7人が来訪